

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別換紙承認第六二七号
平成二十八年七月一日発行(第百十九卷第七号)

ホトトギス

七月号



俳句随想〔四百九〕

汀子

熊本地方に大変な地震が起った。まだ収束していない。大勢の誌友がもらえる九州地方であり、熊本ばかりではなく大分地方にも及んでいる。渦中にある方々のご無事を祈り、何か我々で出来ることを考えなければならぬであろう。今から二十一年前、阪神淡路大震災が起ったときの事が思い出される。水が出なく水汲みをしたことも大変であつた。三か月経つた頃、水道の蛇口から水が出てうれしかった。思わず「春の水甦りたる蛇口かな 汀子」と俳句を作った。ある人から、蛇口から出る水を『春の水』という季題で詠んではけしからんとお叱りを受けた。春の水は、雪解の頃、山から雪解水が滔々と川に流れ込んで勢いよく流れる情景を詠むのであつて、蛇口をひねつて出る水を『春の水』と詠んではならないことではない。私はそれでも、蛇口から出た水を春の水と詠んでいけないことはない。と、文句を言つて来た方に丁寧に反発した。こうであらねばならない。という季題の受け取り方も大事かも知れないが、私は二十余年経つた今でもその俳句は自分では間違つてはいないと思つて大切にしている。

BS俳句会で京都のホテルへ泊つたのが地震の後の旬日だったか「七日目の湯浴みと朝寝京に泊つ 汀子」と作つた俳句が懐かしい。九州で地震に遇われた皆様、俳句を沢山作つて元氣をお出し下さい。俳句はいつも心を支えてくれると私は信じています。思つたまま感じたまま作ること、心が開放されるのではないでしょう。

句日記 汀子

平成二十七年七月一日 ロイヤル俳壇

露 涼し 旅の 回顧を 語り 継ぎ
快 眠に いざな はれゆく 夏 蒲団
夏 蒲団 ぐらゐは 蹴つてあて 元 氣
夏 鰯 一つ 二つ 正して 露 涼し

七月四日 芦屋ホトギス会

咲き終へし 月下美人の 朝となる
一閃の つぶして 止まりて 玉虫に

七月五日 下朝句会

半夏生 ふり返る 日々ありに けり
遠さかる 日々 早さよ 半夏生
花 合歡の 遅速を 問はぬ 旅路 あり
夏 霧を 怖れぬ 山路 怖れつつ
夏 霧の 去 来 六 甲 物 語

七月九日 清交社時行会淡路島

どの 部屋も 涼しき 海の見ゆる 窓
青 空も 今日 の旅路の 梅雨のもの
海 より 風の 涼しき 城の 道
城 跡へ 登る 涼しき 風まと ひ
再 会の 句 碑に 涼風 加はりぬ
声 涼し 明日 の旅程の 打合せ
俯瞰する ところが 涼しき 風の 道

七月十日 工業倶楽部

百合の 香に いつも 通る 道ならず
夏 至過ぎし 刻々ありて ふり向かず
咲き 零れたる 百合の 香なりし かな
梅 雨明の 待たる 旅路 ありし こと

七月十一日 東海ホトギス俳句大会前日句会

露 涼し 人に 馴染みて 鳥 幾種
原 色 の 多き 花とて 暑 から ず
七月十二日 東海ホトギス同人会
次々と 話の 継 穂 明 易し
話 又 つづきの ありて 涼しさよ

旅 涼し 又 どんかうで 帰らん かな
七月十二日 東海ホトギス俳句大会

虚子の 世の つづき ありて 夜の 秋
駅 近し 涼しき 旅も 終り けり
七月十四日 大阪倶楽部

蟬 鳴けば 年の 後半は じまり ぬ
そ こまで を 守られて ゆく 日 傘 かな
百 合の 香に 書き つまづきし 稿 債も
梅 雨明を はつきり 告ぐる こと かな
虹 立ちて 心 切り 替へ ねば ならぬ
七月十四日 網業倶楽部

鍵 かけて 涼しき 館 残し 来し
滝 壺へ 近づく 術の なかり けり
引 返す 滝 音 遠き 所 かな
これ 以上 暑くなる 目の なかり けり
七月十四日 和田克司先生を悼む

七月十五日 夏潮句会

忘 れ 得 ぬ 温 顔 惚 ぶ 夜 の 秋
羅 や 風 に 吹 かれて 風 となる
扇 子の 手い つも 動いて を りに けり
計 報あり 忽ち 暑さ つの りに 来し
日 帰りの 旅 夕 焼の 覚め ぬ 間に
台 風の 予 報 進 路にある 旅 路
七月十八日 石見ホトギス俳句大会前日句会

七月十九日 石見ホトギス俳句大会

合 飲 咲いて みる 咲いて みる 三 瓶 かな
と もかくも 台 風の 鰯 曳きて 旅
三 瓶 には 夏 台 風の 翳 り なし
七月十九日 石見ホトギス俳句大会
雨 も 又 旅 情 深めて 山 の 秋
よ べ こ こに 満 天の 星 見し 晩 夏

七月二十日 地球ボランティア総会

山 の 旅 終 へ 海 の 日 に 又 集 ぶ
遠 き 旅 ぶ り 返 る て ぶ 露 涼 し
一 点 の 雲 な き 朝 海 の 日 よ
七月三十一日 有恒俳句会

梅 雨 明と もう 言 へ さうに 空 仰 ぐ
日 傘 にも 雨 傘 にも と 折 り たい 花
山 の 雨 忽ち 止 み ぬ 合 飲 た む
満 天の 星 を 仰 ぎ て 旅 晩 夏
七月二十一日 無名会

伽 石 を 語り 部 と して 句 碑 晩 夏
山 の 雨 止 み て 又 降 る 旅 の 秋
旅 の 鰯 鰯 着 け ば 忘 れ て 月 見 草
晴 れ て ゆく 山 の 天 気 や 月 見 草
合 飲 の 花 旅 情 は 山 へ 置 い て 来 し
こ の 辺 の もう 見 か げ ざ る 月 見 草
七月二十三日 きさらぎ会

鰯 鰯 も 又 晩 夏 の 旅 の 一 部 分
そ つ け な き 案 内 な り け り 道 を し へ
わ が 行 手 知 る や 知 ら ず や 道 を し へ
雲 の 峰 抜 け ゆく 空 の 旅 路 あり
遠 き 旅 近 き 旅 路 や 雲 の 峰
七月二十四日 アネモネ句会

ひ ろ が り し 夕 焼 消 ゆ る 早 さ かな
昼 寝 す る つ も り ば か り の 二 三 日
雷 去 り て 客 待 つ 心 静 も り ぬ
雷 雲 去 り あ つ け ら か ん と 昏 れ 初 む
西 空 に 迫 る 夕 焼 見 届 け む
雲 染 め て 夕 焼 西 へ 移 り けり
紫 陽 花 の 籠 先 に 着 く 今 宵 は も
七月二十五日 野分会夏行

は や 次 の 旅 程 は じ ま る 晩 夏 かな
一 と 夕 立 欲 し 晴 れ て ほ し 旅 心
七月二十六日 野分会夏行
快 晴 を 喜 び 暑 さ 怖 れ けり
印 象 は 遠 さ か る も の 句 碑 の 秋
冷 房 に 馴 れ て 忘 る へ る ほ ど の こと
七月三十一日 時雨句会

一 番 機 雲 海 抜 け て 航 く コ ー ス
衛 星 の よ ぎ る を 見 た し 夏 の 月
雲 海 を 抜 け て 青 空 あり し こと

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十七年七月一日 蕉沁会

水無月の水の惑星水浸し
梅雨雲に水嵩預け川の黙し
昼酒に昼を灯して船遊
涼しさは大江戸線の軋む音

七月三日 カトリック新聞選者吟

病窓に視野を拡げて明易し

七月四、五日 あうたう句会

夏霧を突き抜けて降る鳥語かな
ブルーベリ園主めく青蛙
梅雨空を押し返しつつ旅路かな

七月九日 土筆会

百合の香に浮き上がりたるマリア像
碁敵と句敵集ひ納涼かな
鈍色を放ちて消ゆる金亀子

七月十一、十二日 東海ホトギス同人会、大会

城までの距離とは汗の歩数かな
未草鳥語に醒めてゆきにけり
通し鴨人の生活の端を占め
癒えし目にいよよ涼しき天守閣
禁酒てふ齷齪を消し去り灯涼し
遠州と土州涼しき縁かな
ハンカチを出せば寄り来る鳥黄色

七月十三日 朝日カルチャー若草句会

炎帝に押し戻されてゆく歩み
炎帝を突き上げ聳ゆ天守閣

地下のいきれ地上の草いきれ
七月十五日 北國文芸選者吟

友の訃や泡一つ吐く水中花
七月十六日 登高会

隣までてふ日盛の修羅場かな

日盛といふ底なしにはまり込む
禁酒には非ずアイスクリームかな
七月十七日 浜田吟行会

日本海でふ夏潮の雄叫びに

灯台の白万緑を司る

風の止む静寂鶯老を鳴く

万緑の傾れ落ちたる日本海
七月十八、十九日 石見ホトギス俳句大会

露涼し嵐を抜けて来し句友

蛸に鳴き包まれて池の黙

梅雨霧に三瓶標高失へり

星空を梅雨空に明け渡す朝

振花の群れてねぢれの揃はざる
七月二十一日 「俳壇」 出句

星月夜この惑星に住む不思議
初秋といふ山の雨山の風

夫婦星三瓶の空を狭めゆく

草原の果銀漢に繋がりぬ

伝説の池溝萩の憂ひかな

人土に流灯水に還り継ぐ

穴まどひ伝説の池守り星夜

二つ三つ零れてよりの星月夜

大花野三瓶は句碑を要とす

稜線を和ませてゐる初紅葉

松虫草句碑へ誘ふ色として

水澄める池は伝説語らざる

揺るる文揺れざる丈の吾亦紅

山の秋荘閉ざす日を近づけて

夜長の灯山の空気を彩りて

朝寒を発ちて山気を纏ひ着く

天高し今も噴きたる三瓶かな

草原に牛固まりて颯風裡

男三瓶を越え女三瓶に鳥渡る
七月二十一日 むさし野吟行会

みんみに首都の喧騒届かざる

都心てふ大正ロマン苑涼し

園丁に整へられてゆく緑

有給を使ひ祇園会行くと云ふ

待ち合せ何時もの金魚売の角

遠汽笛ふと旅心沸く端居

結局はおまけの金魚だけ育ち

この町の長老鉾の稚児でした
七月二十四、二十六日 野分会夏行

好古園競ふ熊蟬油蟬

鯉涼し己が値段を知るやうに

四阿に端居の心育ちゆく

木下閣保護色にして草魚消ゆ

熊蟬に持ち上げられてゆく天守

夏瘦に非ず天守も楽々と

涼風を誘うてゐる樹齢かな

遊船に殿様気分姫気分

朝涼のミサに洗はれゆく心
七月二十八日 若水句会

あの日よりビールを断ちし漢かな

鷺草や白鷺城と競ふかに

鷺草や播磨の風に磨かれて

死角無き城壁掠め落し文

七旦三十一日 こもろ日盛俳句祭

虚子の遺志ここに繋げて句座涼し

百日紅虚子の疎開の語部に

雑詠

廣太郎 選

被災して二十一年出初式	神 戸 千原 叡子
四次元を舞ふ風花に心寄せ	同
春寒くとも杖二本突かうとも	同
梅見バス熱海桜も見ると着く	熱 海 嶋田 一步
夕日来て白梅は影持ちにけり	同
夕暮れて紅梅は色沈めけり	同
追悼の日より春寒つづく旅	長 岡 安原 葉
梅園の一本づつのゆたかな名	同
冴返る 旅風雪の 関ヶ原	同
釣れてよし釣れなくてよし日町ぼこ	東 京 大久保白村
銀杏散り止まず赤信号なれど	同
コート先づ脱ぎ日本間の客となる	同
天空へ羽搏いてゐる露の臺	福 山 竹下陶子
白鳥の 零下三度といふ白さ	同
乾坤を一如としたる吹雪かな	同
春怒濤ことばに力与へたまへ	熊 本 岩岡中正
濤どすんどすんと春が来りけり	同
著ぶくれてことば漁の人となる	同

よく動く寒紅の口見てをりぬ	神 戸 山田佳乃
しなやかに腕を抜け出す恋の猫	同
波立てば色の生まるる春の虹	同
初めての靴草の芽に一步づ	同
忘れたる眼鏡届きし大試験	同 藤井啓子
上靴に残るイニシャル大掃除	同
春の雪呑んで竹林揺れ止まず	松 山 中野匡子
受験子のつぶやきは皆英単語	同
潮風に春待つ阿波のへんろ墓	同
花万 朶月月火水木金金	東 京 橋本くに彦
赤門へ親と下見の花衣	同
足止めて足留められて花巡り	同
北風に向く全身が音となる	渋 川 山本素竹
濡れる石濡れざる石や春の雨	同
一本の雌しべを残し落椿	同
俳磚の藍の字浮かせ春時雨	神 戸 涌羅由美
はるしぐれこぼしそらいる戻りくる	同
鋭角の星の煌めき冴返る	同
上州の空を切り取る初景色	渋 川 木暮陶句郎
窯口に人日の闇ありにけり	同
人生も少し薄味 薺粥	同
桃日和舟を仕立てて城見とや	奈 良 古賀しぐれ
太閤の世へと水脈曳き舟臚	同
城囲みビルてふ空の陣臚	同

雑詠句評（六月号より）

純也・一步・くに彦

さい雪・公次・仁義

雅・佳乃・霜衣

しげ人・廣太郎

同じ径辿らせてゐる雪女 米子 中村襄介

厳寒の大雪の同じ径を、何度心何度も辿らせて男の体を冷やきつて、やがて凍死に至らしめる、恐ろしい恐ろしい雪女なのだろう。伝説、伝承の世界のことではあるが、こうしたこともあつただろうと思わせる臨場感がある。ただ、同じ径を辿らせていることを知っているのは、誰なのであろう。そんなことを詮索する必要のない、雪女の伝説ではあるのだが……。 （純也）

筆者が「雪女」に何度も会っている事は以前も申し上げた記憶があるが、目の前に実体として現れるというよりは、何か人間離れした超自然的な現象、とでも言うのだろうか、正にこの句のよ

うに人間を別の世界へ引き込むような不思議な体験をさせてくれるのである。ちょっとした魅力もある。（廣太郎）

ブラチナも金もダイヤもクリスマス

渋川 木暮陶句郎

ブラチナは白金。そして金とつづけば、なにかネックレスやイヤリングなどが浮んで来、更にダイヤモンドと言われると指輪など、所謂、人の特に女性の装飾品のあれこれが浮んで来る。そして季節のクリスマスとくれば、私には具体的な景としてクリスマス・イブのパーティーとか晩餐会などのイブニングドレスを着た婦人の姿を俳句で言う客観的な景として見えてくるのである。

此の句は名詞だけを連ねて全く動詞のない季題、クリスマス・イブの一景を描いている。省略の効いた句であると言えるかも知れない。（一步）

これ以上ないゴージャスな「クリスマス」の祝賀ムードが漂ってくる。昨今のクリスマスパーティーの様子が楽しく伝わってくる句である。ただ、聖書によると、キリスト御降誕は、馬小屋の中で、質素な形で神が人間になられた。何かそんな事実も感じさせてくれるような句でもある。（廣太郎）

〈以下略〉

天地有情

雪晴の朝の静寂の金閣寺	長岡	安原	葉
七種や京に住みし日なつかしむ	同		
今年酒酌めば横川に一忌日	東京	稲畑廣太郎	
新酒酌む嗚呼泊雲よ余花朗よ	同		
人形が言ひぬ読書の秋ですよしをりあり秋の扇となりしより	神戸	後藤比奈夫	
待春の空より降つてくることば	熊本	岩岡中正	
存問といふあたたかきことのあり	同		
水澄むや大きな石に腰かけて	神戸	浜崎素粒子	
草の花しばらく行けど草の花	同		
骨休め骨休めとて春の風邪	東京	河野美奇	
お喋りに変はりなかりし春の風邪	同		
広島のはだしのゲンや原爆忌	福山	竹下陶子	
胸を撫でおろして汗をぬぐひけり	同		
乗初の遺影も連れて富士を見に	相模原	木村享史	
一と言を遺影に詫びて初旅に	同		
ほろと黄が櫛の花にちがひなし	神戸	後藤立夫	
どこやらが真剣なりし裸雛	同		

立子忌や赤鉛筆は傍らに	東京	今井千鶴子
音もなく焰も見せず這へる野火	同	
死ぬるまで生きねばならぬ日永し	群馬	中杉隆世
長生きをせしと日永の山にいふ	同	
立春の朝の光をポストまで	吹田	大橋 暁
庭の梅探れば姉の視線ふと	同	
くちなしの花の終りの雨しづく	東京	今井肖子
梅の実の落ちて淋しき土の上	同	
円満の秘訣は裸裸雛	神戸	和田華凜
流るるも止るも二人流し雛	同	
消息をしかとも聞けず春寒し	同	三村純也
一病を雛にも託す思ひあり	同	
春雷ややはりローマのあの旅を	宝塚	水田むつみ
初咲きも散り敷く色も庭うらら	同	
雲丸くまとめながらも春寒し	東京	橋本くに彦
園の色かへつつ残る寒さかな	同	
また使ひ残してしまふ水菜かな	龍ヶ崎	今橋眞理子
梅の香のかたまつてくる一歩かな	同	

立子選

梅 林

稲畑汀子

もう何年になるだろうか、毎年、大晦日になると本郷桂子さんが盆梅をもつて訪ねて下さる。梅が咲き終わると地に下ろして今では梅林が出来そうなほどになった。

我が家の北側の家には兄嫁が一人で住んでいた。五人の子供たちは殆どが東京で家庭を持ち時々訪ねて来る。長男一家は同じ芦屋でもスーパの冷めない距離に一家を構えて住んでいる。

我が家と義姉の家の間は、フェンスで区切られているが、簡単に行き来が出来るように止め金で開け締め可能で、そこは殆ど開けっ放しになっていた。

「東京から帰って来たのよ。このベアコン美味しいから召し上がって頂戴」勝手口から現れた義姉は何かと留守がちの我が家を訪ねてくれた。

ある日、仕事から帰って来た義姉の家の前に、消防車が何台も停っていた。

「え？」

びっくりして我が家に駆け込むと、お手伝いの鈴木さんが飛び出して来て、

「隣の奥様が、お鍋をかけたままお出かけになって、台所の煙で連絡が行ったらしく消防車が来て仕舞ったのです。でも大事にならなくてよろしゅうございました」と言う。

長男の嫁も来ていた。やがて義姉が買物から帰って来て、「えっちょっと買物に行ってしまったのだけど何事なの？」と平然としていた。

その義姉が亡くなって、隣の土地を手離すことになったと報せがあった。至急フェンスを取外し塀で仕切らなければならなかった。

勝手口に入る手前の少しの空間には、毎年頂く盆梅を下ろした一劃があり、まるで梅林ができそうになっていた。昭和十一年に植えられたという百日紅の大き木が境目にどんとあり、毎年花を咲かせていたが、伐らなければならなかった。藁が伸びているのを何とか助けて移し植えてみることにした。大きな鞍馬石は半分に切ることになった。

塀が出来上がると、すっかり大きくなっていた古い盆梅はもう一人前の梅の木になっていた。庭の方へ下ろした梅もある。

「口丸さん。虚子記念館へ抜ける庭の石畳に蹟く人があったら大変だから何とか手摺を作って貰えないかしら？」

「え？」

又、私が難題を持ちかけたのを辟易したような顔は見せずに聞いてくれた。

「不細工と違いますか？」

「でも、転ばないようにしないと、お年寄りが多くなる時代だから、万全を期すことにしましょうよ」

「そうですね」

庭を歩きながら、

「ここをずっと竹でやってみて頂戴」

「へえー」

東京から帰って来た私はあつと驚いた。庭が一変している。飛び石が配置されてある辺りに、太い青竹が張りめぐらされてあるではないか。

庭を一巡りして書斎へ入ると椅子を庭に向けて座って見た。

「まあ、いいじゃない！」

一人で呟いてじつくり眺めてみた。間もなく見慣れるであろうし、これで転ぶ人はなくなるであろうと確信した。

「間の杭は、地上に見えている部分より一メートル余分に深く打ち込みました。びくともしません。案外、見た目も慣れればいいのではないでしょうか」

口丸さんは芝に目土を入れに来た時に自慢して帰った。

二月になると隣の虚子記念文学館で虚子生誕祭や国際俳句シンポジウムが行われる。沢山の方々に出席いただければ、我が家の庭にも溢れ出て来て下さるであろう。

転ばぬ先の杖も整った。

「廣太郎！庭の手摺見た？」

「へえ？まだ見てない！」

手摺の間の空間に下ろした盆梅もしっかり育っている。

